The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	メコンデルタについて
Author(s)	住村, 欣範
Citation	GLOCOLブックレット. 2013, 11, p. 81-86
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48299
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【第2部】

メコンデルタ

メコンデルタについて

住村欣範　大阪大学グローバルコラボレーションセンター准教授

インドシナ半島の南西部に位置するメコンデルタ（ここでは主としてベトナムの一地方としてのメコンデルタを指す）は、水を中心とする自然環境の豊かな地域である。メコンデルタの領域は4万平方キロメートルと広大であり、周辺地域だけではなく、地球全体の環境の成り立ちにも大きな影響を与える。

しかし、歴史的には、比較的最近になってから本格的に開発された地域であり、安定的な土地・水の利用方法も十分確立しているとは言えない。生活様式や農水産業の基盤が確立していないことが、ベトナムの経済発展のなかで環境問題に繋がる要因となっている。

経済面から見ると、2012年にベトナムはタイを抜いてコメの輸出世界1位になった。ただし、コメの価格は安く抑えられており、ドイモイ以降急速に発展してきたコメの輸出が、生産の大半を占

写真1：水とともに暮らす人

写真２：メコンデルタの水路

写真３：メコンデルタの水路２

写真４：蓮の池

写真５：メコンデルタに咲く蓮

写真６：エビ養殖池

写真７：エビ養殖池２

写真８：ミ・カィン村の住民

めるデルタの住民の生活の向上に結びついているとは言えない。コメのブランド化など、新たな取り組みが模索されているところである。

　また、淡水魚の輸出はベトナムの経済において重要な産業に発展しており、地域の経済のみならず国家・地域の経済に果たしている役割は日増しに大きくなってきている。ベトナムの水産物輸出は、養殖エビやナマズ（キャットフィッシュ）などの淡水魚を中心に近年大きく伸びており、同国の基幹的な外貨獲得産業となっている。輸出先は米国、EU向けが大きく伸び、世界的な水産物輸出国としての性格を強めている。エビに並ぶ輸出魚として

写真９：紫の色素で染めたおこわ

写真10：雨水をためる瓶

写真11：植物の調査

この10年あまりでベトナムのナマズの輸出量は50倍、輸出額は60倍以上となり、現在世界のほぼ100%のシェアを占めている。

このような食料生産の拡大の背後にあって、至急対応すべきは資源収奪型（非持続可能）の農水産業の問題である。ベトナムでは、この10年の間に、エビなど淡水魚類の養殖が急速に広まった。養殖はメコンデルタに集中している。高集積養殖による水質および底質の汚染は深刻であり、一定回数以上の持続的使用が難しくなっている。また、抗生物質の使用によって抗生物質耐性菌の出現が頻発し、ベトナムのみならず世界レベルで医療の深刻な脅威が発生する危惧が生じている。

さらに、地球温暖化にともなう気候変動もメコンデルタに大

写真12：薬草を処方するお寺

写真13：鶏からのサンプリング

きな影響を引き起こそうとしている。ベトナム国内及び海外の研究機関によって近年行われた調査研究によれば、ベトナムは地球温暖化による気候変動の影響に対し最も脆弱な国のひとつとされている。特にメコンデルタ地域一帯は、将来的な気候変動に伴う海面上昇等の影響によって、多くの地域が冠水、塩水遡上、淡水不足等の被害を受けることが予測されており、地域住民の生活への影響に加え、今後の農業農村開発においても多大な困難を強いられることが懸念されている。

写真14：水路の水草

写真15：薬剤耐性菌の検査

以上のようなメコンデルタの状況を踏まえ、海外フィールドスタディ「メコン」に参加した学生５名は、３つの調査チームに分かれ、それぞれの専門性に基づいた研究テーマに関して調査と研究を行った。調査にあたっては、事前の研究計画の策定、調査の手続きやロジ、そして、研究指導にあたって、国際協力部、農業および応用生物学部、環境学部、メコン開発センターなどに所属するカント一大学の教員・専門家による多大な支援を受けることができた。当該地域において学生が事故もなく調査を完遂することができたのは、ひとえにカント一大学の協力によるものであると考える。

「メコン」に参加した大学院生の視点は、当該地域における単なる既存の研究の延長線上にはない斬新な視点を持ったものであり、どれもが研究として一定の水準の成果を上げ、報告書の内容は、今後、研究者当該地域で研究を行う際にも十分に参考にすることができる内容を備えていると考える。